寺師コレクションの滑石関係資料３例

東　和幸

1　はじめに

寺師見国（1889～1959）氏は医院を営む一方で，鹿児島県における考古学研究の基礎を築き上げた。研究範囲は県内はもとより県外にも及び，その成果は各研究誌に発表されると共に，寺師コレクション（寺師家資料）として鹿児島県歴史資料センター黎明館に寄託されている。このコレクションの中に，縄文時代の滑石に関わる資料が含まれており，3例を紹介するものである。

筆者自身，土器の胎土に注目しはじめたのは３年ほど前のことであり，それまでは漫然としか土器を見ていなかった。「縄文時代は自給自足の時代であり，土器も集落周辺でつくられたもの」と疑いもなく認識していた筆者にとって，「同じ遺跡の出土土器であるならば，時期が違っても同じような胎土であるはず」という疑問を抱いてから土器を見る目が変わってきた。それと同時に，「それぞれの遺跡における周辺地域の地質はどのようなものであるのか」を併行して追究するために，前職場の有志と共に各地の河川砂礫を採集し，その成果を発表してきた（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005・2006）。

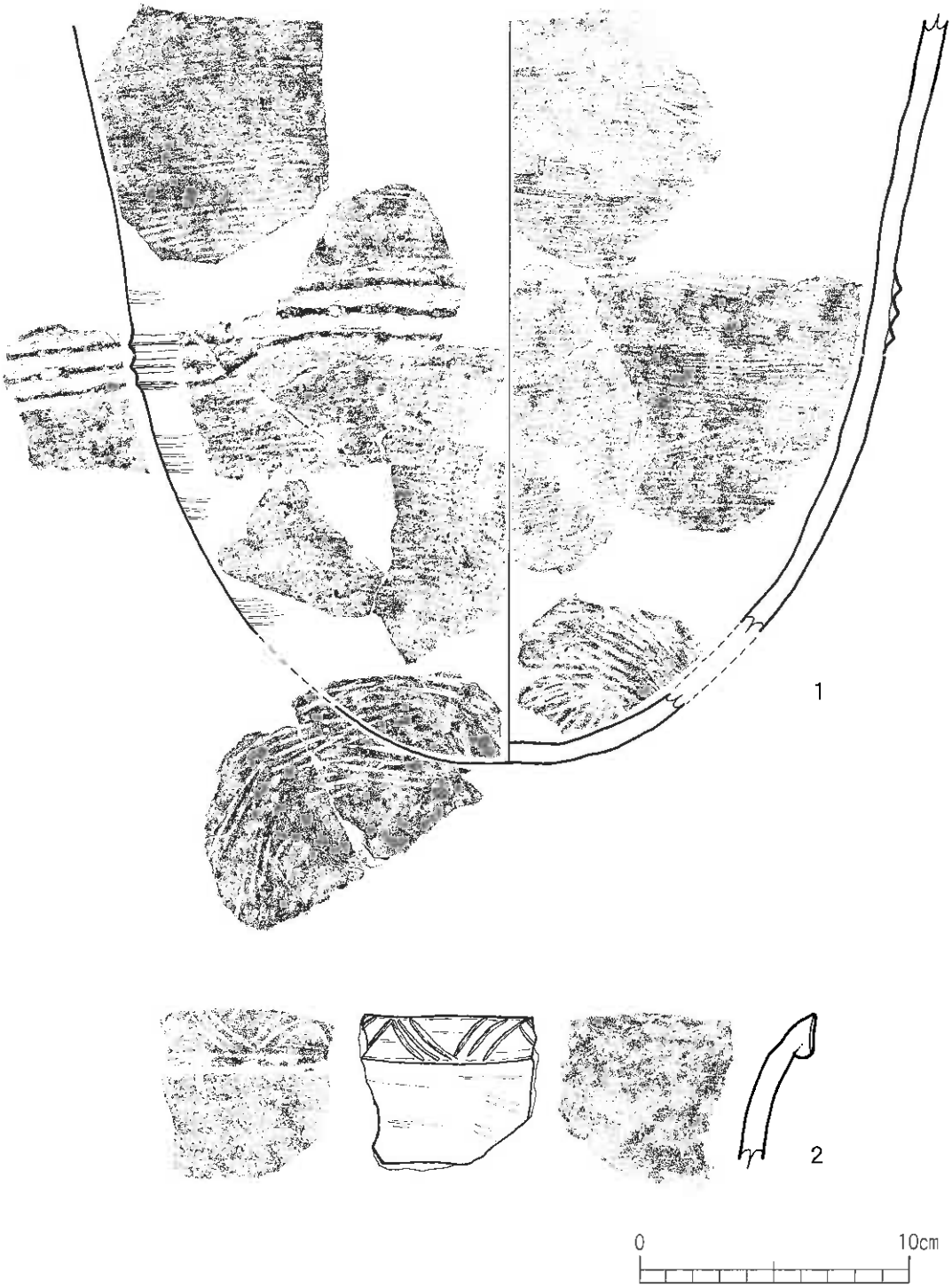
その結果，同じ遺跡で出土した土器であるにもかかわらず，胎土に含まれる鉱物は多彩であることが確認できた。また，それらの土器胎土は必ずしも周辺地域の地質と共通するものばかりではなく，離れた場所から持ち込まない限りこのような状況は考えられないものもあることがわかった。特に，産出地が限られ肉眼でも識別しやすい滑石と金色雲母については，土器もしくは胎土鉱物が移動したことの証拠となり，縄文社会を考える上で重要な資料となる。

以上のことから，寺師コレクションにある滑石関係資料３例は，これまで知られていなかった型式の土器にも滑石が含まれる点や，原石そのものが遺跡に存在したという点で貴重なものであり，紹介する意義が大きいと考える。なお，上述した点については70年も前に寺師見国氏が指摘していたことであり，今回はそれをトレースしたに過ぎない。

2　滑石関係資料の紹介

(1)　轟Ｂ式土器

同じケースの中に３つの大きな破片があり，それぞれ接合することはないが，器面調整や胎土・色調が共通することから，同一個体であると考えられる。さらに，別のケースに同様の破片２点があり，これも同一個体の可能性が高い。接合がなされているが，出土した時点ではバラバラの状態であったと考えられ，それぞれの破片に「阿多貝塚」・「阿多貝」・「阿多」・「阿貝」・「阿」などの墨字による注記がなされている。したがって，南さつま市金峰町に所在する阿多貝塚の出土品であることが確認できる。阿多貝塚は古くから「貝殻崎」と呼ばれており，寺師見国氏の発掘調査によって縄文時代の貝塚であることがわかった。寺師見国氏による昭和



第１図　滑石入りの縄文土器

（1.阿多貝塚出土轟B式土器　2.並木遺跡出土中尾田Ⅲ類土器）

18（1943）年の文献で，轟式土器の説明に「只先年予が発掘した阿多貝塚から此形式の物が相当に出土したが，此処の物は赤貝属貝殻の腹縁によって，ひっ掻いた条痕が附せられてある土器表面に隆起細帯文が施されてあり，粘土に滑石を混じ形は丸底の鉢形である。」（寺師1943 p7ℓ6～8）と記してあり，資料1を紹介している。阿多貝塚は昭和53（1978）年に金峰町教育委員会が調査主体となり確認調査が実施され，貝層の範囲の把握と各時代における生活痕跡の実態が明らかとなっている（金峰町教育委員会1978）。

資料1の底部は丸底で，球形に近い形である。内外面とも貝殻条痕による器面調整であり，5回ないし6回で周囲を巡るような方法を採る。したがって，底から見た条痕は多角形に見えるが，正位に置いた場合は水平方向に条痕が施されているように見える。胴部は開きながらほぼ真っ直ぐ立ち上がり，中位に3条の突帯が巡っている。突帯は上から下へ順に貼り付けられた状況が窺え，一周巡ってきた部分で2条分上下にズレている状況が観察できる。器面調整は，両面とも横位あるいは斜位方向の貝殻条痕によるものである。器壁は0.7～0.8cmで，大きさの割には薄い印象を受ける。胎土には滑石の岩片や細粒を多く含み，それ以外には赤褐色の小礫がわずかながら観察できる。色調は全体的に赤褐色を呈している。残念ながら口縁部の破片はなく全体の形状はわからないが，おそらく口縁部にも数条の突帯が巡るものと想定される。

(2) 中尾田Ⅲ類土器

資料2は内面に「並木」と注記された口縁部破片であり，九州の縄文時代中期を代表する並木式土器の標式遺跡である，大口市羽月並木遺跡出土であることが確認できる。寺師見国氏による昭和11（1936）年の文献では，並木式土器を「変形爪型文」という名称で報告し（寺師1936），昭和18（1943）年の文献で「並木式土器」と記してあり，この間に型式名が定着したことが解る（寺師1943）。

資料2は外反しながら大きく開く口縁部であり，口唇部に接して断面三角形の肥厚部をもつものである。口唇部は尖り気味に仕上げ，肥厚部下面は段をもち，接合痕を残している。文様は鋭いヘラ状工具による3条の沈線で，肥厚部一面に三角形を連ねる。右から左の方向に描かれており，全体的には鋸歯状となる文様である。内外面とも丁寧なナデによる仕上げであり，色調は赤褐色を呈する。胎土は半分ぐらいが滑石であり，他に鉄錆状の小石も含まれている。器壁の厚さは，0.9cmである。

(3) 滑石原石

写真資料にある3は，滑石の原石である。表面に墨書きで，「水俣南福寺貝塚　南福寺」とあるので，熊本県水俣市南福寺貝塚出土であることが確認できる。寺師見国氏は昭和11（1936）年1月と3月，それに昭和13（1938）年1月の3回調査を行い，昭和14（1939）年にその成果を発表している（寺師1939）。その記述の中に「予は此処で滑石塊を拾ったが，他分これ等の滑石も粉末として土器製造に使ったものと思われるけれども，現在の土器には肉眼上で認められる程の滑石粉を含有した物は無い。」（p426ℓ14，15）とあり，資料3はその中の1点であると考えられる。なお，寺師見国氏は三角縁を特徴とする第二類土器を「南福寺式土器」としたが，現在では「松山式土器」と呼ばれるようになり，寺師見国氏の第一類土器が南

1．阿多貝塚出土轟Ｂ式土器　　2．並木遺跡出土中尾田Ⅲ類土器　　3．南福寺貝塚出土滑石原石

福寺式土器として定着している。

資料３は最大長9.1cm，幅6.8cm，厚さ3.2cmを測り，重さは219.5gである。透明感のある白色を呈し，全体的に摩耗している。加工した痕跡はみられず厚みがあることから，中世の滑石製石鍋とは考えられない。出土した層位を確認することはできないが，縄文時代である可能性は充分あり得る。

3　滑石関係資料の検討

(1)　轟Ｂ式土器

資料１のような底部が丸底を呈し，指押さえ状の突帯をもち，内外面が貝殻条痕による器面調整である特徴の土器は，熊本県宇土市轟貝塚を標式とする轟式土器である。轟式土器は松本雅明氏と富樫卯三郎氏によってＡ～Ｄ式に分類され（松本・富樫1961），資料１は縄文時代前期前半に位置づけられる轟B式土器に該当する。轟式土器は多くの研究者によって研究が続けられており，アカホヤ火山灰を挟んだ轟式土器の時間的な位置づけと，器形の単純型と屈曲型の系統差をどのように解釈するかという点が論点となっている。最近栗畑光博氏は轟式土器を再検討し，轟B式土器を３段階に分けると共に，それ以前に西之薗式土器を設定し，アカホヤ下位からのスムーズな流れを提示している（栗畑2002）。これに基づくと，資料１は轟B式土器の中でも最も新しい段階に位置づけられる。

これまで滑石を含む轟式土器は，長崎県伊木力遺跡（同志社大学文学部文化学科1998）や熊本県曽畑貝塚（熊本県教育委員会1988），長崎県深堀遺跡（長崎市教育委員会1984）でしか確認されていなかったが，資料１のように復元可能な滑石混入の轟B式土器が知られることによって類例の増加を期待したい。また，曽畑式土器よりも古い時期から土器に滑石を混入することも明確となり，この技法の初源を追究する上でも重要な資料である。

(2)　中尾田Ⅲ類土器

資料２は，肥厚部下面に接合痕を残す点と鋸歯状の文様を施すことから，中期後半に位置づけられる中尾田Ⅲ類土器ではないかと考える。中尾田Ⅲ類土器は霧島市横川町中尾田遺跡で確認されたものであり（鹿児島県教育委員会1981），資料数は増えてきたものの未だ単純遺跡に恵まれず，型式設定が保留されたままの土器である。下面に接合痕を残した肥厚部をもち，さらに粘土紐を貼り付けて鋸歯状の文様を加飾する特徴があり，筆者自身は春日式土器と大平式土器を繋ぐ土器型式が中尾田Ⅲ類土器ではないかと考えている。中尾田Ⅲ類土器の段階に位置づけられる滑石を含む土器は，長崎市深堀遺跡・福岡県久留米市蔵上遺跡・鹿児島県南さつま市上焼田B遺跡・鹿児島県菱刈町松美堂遺跡，それに宮崎県えびの市上田代遺跡の完形品もこの時期に相当すると考えられ比較的広い範囲で出土している。

中尾田Ⅲ類土器と並木式土器や阿高式土器との関係についての統一した見解は得られていないものの，並木式土器の標式遺跡で滑石混入の中尾田Ⅲ類土器が出土した意義は大きい。同遺跡で出土している他型式土器も含めて検討し，両者の関係を明らかにすることが今後の課題である。

(3) 滑石原石

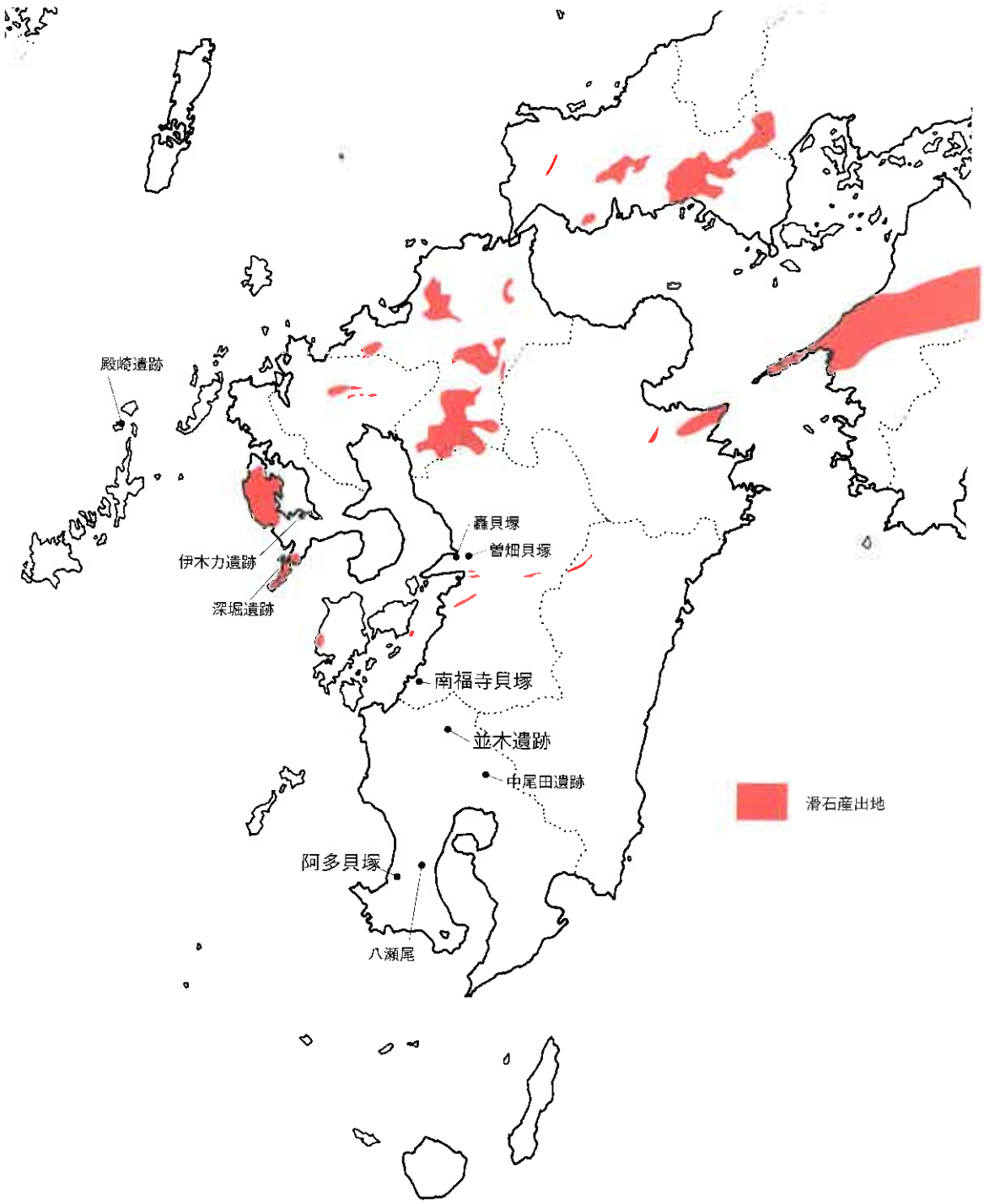
縄文時代の遺跡から滑石の原石が出土した例は，長崎県五島列島に位置する小値賀町殿崎遺跡が知られている。五島列島には滑石を産出する場所はなく，最も近い産出地は長崎県西彼杵半島である。一方，水俣市南福寺貝塚から最も近い滑石の産出地は，深水構造帯にある熊本県坂本村や天草諸島の樋ノ島がある。しかし，それぞれの遺跡で出土した滑石の原石が，最寄りの産出地から運ばれたものであるとは限らず，産出地を特定するには科学的な分析（今岡ほか2006）が必要となる。いずれにしても，滑石の産出地から離れた場所で原石が出土しているという点が重要であり，土器胎土の混和材とは限定できないものの，土器製作地を考える上で興味深い資料である。

4 若干の考察

寺師見国氏は，縄文土器がその土地でつくられたものばかりでなく，遠くから運ばれたものであるということを既に昭和11（1936）年には指摘している（寺師1936）。「尚石器時代人が案外遠隔の地まで交通して居たと思われる事は，当地あたりから各種の海水産貝殻紋土器が多く出土する事と，滑石土器や緑泥片岩の石斧が多数に出る事である」（p39ℓ13，14）とし，「各地方の粘土と，土器の土質の関係を分析でもして，此方面からでも土器の製造地がわかる事になれば，或は意外に遠隔の地から土器も運搬されて居る事が明になる時があるだらふと思われる」（p40ℓ3,4）と，その解決方法まで提示している。筆者自身，まさしく寺師見国氏の指摘から70年の時を経て，ようやくその入口に立ったところである。

縄文土器に滑石を混入する慣習は，九州地方独特のものである。隣接する山口県以外では島根県益田市匹見町石ヶ坪遺跡と広島県芸北町樽床遺跡で出土した例もあるが，いずれも九州に源流のある土器である。これまで，前期後半の曽畑式土器，中期後半の並木式土器及び阿高式土器，後期初頭の南福寺式土器に滑石が混入していることは知られていたが，中期中半の春日式土器の各段階にも滑石混入の土器が伴うことがわかってきた。さらに，今回前期前半の轟B式土器と中期後半の中尾田Ⅲ類土器にも，滑石混入の土器が伴うことがわかり，中期前半期を除く前期から後期初頭まで滑石混入土器の存在が明らかとなった。

滑石を混入する土器に注目する点は，滑石を産出しない地域でも出土することであり，縄文土器の製作地及び製作者を考える上で大きな示唆を与えてくれることである。「縄文時代は自給自足の生活であり，縄文土器もムラごとにつくられていた」と筆者自身これまで認識していたが，滑石を含む土器が滑石産出地以外の地域でも出土することから，再考しなければならない。地質学的に明らかとなっている九州の主な滑石産出地をみると，長崎県西彼杵半島と野母崎をはじめ，福岡県大牟田市から宗像市にかけてのライン，それに熊本県八代市から大分県臼杵市へ続く深水構造帯がその産出地として知られている（猪木1955）。滑石は成分としては蛇紋岩と同質であり，両者は近くに存在することがある。前述以外の地域でも，例えば鹿児島県川辺町八瀬尾のように蛇紋岩の産出が知られた場所はあるが，滑石までは確認されていない所もある。もし，このような場所に滑石が存在したとしても多くの量は望めず，土器胎土にみられるような良質の滑石を供



第２図　滑石産出地と関連遺跡

給するほど存在したとは考えられない。鹿児島県立埋蔵文化財センターの有志が九州各地の河川砂礫を採取し，実体顕微鏡で観察した結果，滑石が含まれる河川は上述した地域に限られることが明らかとなった（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005・2006）。

滑石の産出地が限られるということは，滑石を産出しない地域を把握できるということであり，深水構造帯から南東へ流れ出る河川流域より南東側には，滑石を採集できる場所がないと言える。地域名でいえば，熊本県南部，北部を除く宮崎県，それに南島を含めた鹿児島県と沖縄県では，滑石を採取することはできないのである。これらの地域で滑石を含んだ土器が出土するとすれば，①滑石を入手して地元の人が地元でつくった。②滑石を携えた産出地周辺のつくり手が各集落を巡ってつくった。③滑石の産出地でつくられた土器が各集落に運ばれた。などが想定できるのである。縄文土器の製作遺構が確認されない以上議論は進展しないのであるが，滑石もしくは滑石混入土器は人の手によって動いたことは明らかである。滑石産出地以外の遺跡で滑石原石が確認されている長崎県小値賀町殿崎遺跡と熊本県水俣市南福寺貝塚例は，①または②の証拠となり得るが，普遍的だったとするには事例が少ない。なお，資料１と２は時期も出土場所も全く異なるものの，胎土や色調が良く似ている点は③を想起させるものである。

5　おわりに

鹿児島県歴史資料センター黎明館に着任して，最初の仕事が５年ごとの寄託更新であり，実際に見る寺師コレクションには目を奪われるものが多かった。その中でも今回紹介した滑石関係３例については，ちょうど筆者がテーマとしていただけに，その巡り合わせに感激した。しかも，寺師見国氏は70年も前に伊佐盆地で出土する滑石混入土器を基にして，縄文土器の流通のあり方を指摘していたことを知り，自身の浅学さを知ると共に寺師見国氏の偉大さを実感した。何事もそうであるかもしれないが，意識しておかなければ気づくはずのものも気づかない。もの言わない遺物に語らせるには，こちらからどんどん問い掛けをしていかなければならず，同じ遺物でも常に違った視点で見る努力をしていきたい。今回紹介した滑石関連資料を契機に，新たな資料が出てくれば有り難いし，縄文土器の製作地や流通に係わる研究が進展することを期待したい。

猪木幸男　1955 『日本地質図体系　九州地方』 朝倉書店
今岡照喜・中村徹也・早坂康隆・鈴木康之　2006 「滑石製石鍋原材料の比較研究　―長崎県ホゲット遺跡と山口県下請川南遺跡―」『考古学と自然科学』vol.52　日本文化財科学会
鹿児島県教育委員会　1981 『中尾田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005 「土器胎土の鉱物を求めて１」『縄文の森から』第３号
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2006 「土器胎土の鉱物を求めて２」『縄文の森から』第４号
金峰町教育委員会　1978 『阿多貝塚』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
熊本県教育委員会　1988 『曽畑』熊本県文化財調査報告第100集
来畑光博　2002 「考古資料からみた鬼界アカホヤ噴火の時期と影響」『第四紀研究』第41巻第４号
同志社大学文学部文化学科　1998 『伊木力遺跡』
寺師見国　1936 「北薩（伊佐郡）地方の縄文土器」『史前学雑誌』第８巻第６号　史前学会
寺師見国　1939 「肥後水俣南福寺貝塚　－南福寺式土器－」『考古学』第10巻第７号　東京考古学会
寺師見国　1943 『鹿児島県下の縄文式土器分類及び出土遺跡表』 鹿児島県肇国聖跡調査会
長崎市教育委員会　1984 『長崎市立深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』
松本雅明・富樫卯三郎　1961 「轟式土器の編年　－熊本県宇土市轟貝塚調査報告－」『考古学雑誌』47

（本館 学芸専門員）